

## —《書評》—

柴田哲雄著 彩流社

**『習近平の政治思想形成』**

(東北文化学園大学) 王 元

**研究の必要性**

最近、我々は習近平体制に対するいくつかの分析において、大きな誤りがあると気付いた。登場した当初は習近平のリベラルな側面が強調され、開放的な指導者として評価された。しかし現在、習近平は予測されたような史上「最も弱い帝王」ではなく、むしろこれまでの30年間で最強の指導者となっていて、「毛沢東の再来」と呼ばれるほどである。

本来中国が毛沢東の文革体制から鄧小平の改革体制、さらに江沢民および胡錦濤の大國台頭体制まで歩んできたのは、権力の分散と政治的多元化路線の上を進んできたからといえる。そのため、習近平体制が登場した当初、一部の分析者の間では中国社会はより自由民主化されるだろうとの予見もあった。この分析は特に習近平の父、習仲勲の政治的志向性と合わせて分析するとき、より一層強くなった。しかし、習近平の過去3年間の施政手法を見れば、当初の予測から大きく外れたといえる。習近平体制は毛沢東以後もっとも集権的な政治体制となっている。

これまでの誤った分析を改めると同時に、分析がなぜ誤ったのか原因を究明しなければならない。

**研究は困難**

しかし、これは困難に満ちている研究である。現在中国の政治家は往々にして若い時に技術畠から政治の域に入って、様々な地方を転々としながら一歩一歩、中央政治に上り詰める。したがって、彼らは理論家ではなく、職業（官僚）政治家であるといえる。上級指導者になってからの演説・発言は事前に用意されたものがほとんどで、

往々にして側近の政策立案者との共同作業によるものである。論文や著作も毛沢東時代の指導者よりも格段に少ない。

思想研究における第一級の分析材料が大変不足しているなか、独自な手法を編み出す必要がある。著者は、習近平の地方在任時期の多様な論文・資料（それも政治思想的なものとは限らない）、習近平自身の回想などを読み解き、さらに彼の周辺にいた人物の文芸創作作品なども参照して、時として著者の推測を交えながら、出来得る限り習近平の思想形成の真相に追ろうとした。その際、父・習仲勲の思想との異同や毛沢東の影響如何についても検討した。

権力者のリーダーシップについて論じる際には、その生涯のその時々の言行から政治的志向に連なる思想の形成を明らかにすることが効果的である。

**本書の主要内容**

以下、本書のあらすじを読者が理解できるように、順を追って示そう。

「本書の視角」では現在の中国政治の傾向について要約し、本書の問題意識、分析の手法および研究上の問題点などについて言及している。これまでの派閥分析法の有効性と限界については、習近平は各派の均衡の上に権力基盤を築くという状況から出発したが、権力の集中化に伴って、党中央政治局常務委員会における彼のリーダーシップは著しく強化されていると指摘。習近平は歴代の共産党のトップのなかで「最弱の帝王」ではなく、今後彼が中国の内政・外政面における重要な諸政策に対して、極めて大きなリーダーシップを發揮することを予測した。

プロローグ「習仲勲・習近平父子の生涯」は、習近平と習仲勲のプロフィールに関する簡略な紹介である。

第1章「断章——習近平の思想形成とその周辺」では、習近平の思想形成に関して様々な角度から

分析する。習近平は最高指導者に就任して以来、矢継ぎ早に毛沢東回帰を思わせる政治的な動きを示してきた。習近平の昨今の毛沢東回帰の原点を、父・習仲勲からの継承、文化大革命に際しての「下放」経験、青年期の政治的な理想などから求め、さらに彭麗媛夫人の肖像についても取り上げた。

著者は習近平が毛沢東の影響を受けているのは、幼年期の成育環境が大きな要因になっていると推測した。多くの革命元勲の子弟と同じように、全寮制の幼稚園と小学校で教育され、「疑似的な家庭の中で、主に教師や保母によって情操を育まれた上で、毛沢東崇拜をはじめとする社会主義の思想教育を受けていた」と指摘した。

第2章「習近平の福建省在任時期における経済・政治思想」では、習近平が30代から40代に公表した著述などに基づいて、その経済的思想や政治的思想の原像などを明らかにする。さらにそれらが昨今の習近行政権の内外の重要な諸政策にどのように反映されているかを検証している。

第3章「習近平の福建省在任時期における外交政策の原像と対台湾政策」では、習近平が福建省で官途に就いていた時期（1985～2002年）に公表した著述などに基づいて、その外交政策の原像などを明らかにする。さらにそれらが昨今の習近行政権の外交政策にどのように反映されているかを検証した。

第4章「習仲勲の民主化志向の政治改革をめぐる姿勢、並びにその擁護の背景にある前半生の経歴」では、習近平は父・習仲勲が熱心に擁護してきた民主化志向の政治改革に対して、冷淡な対応をとり続けている原因を突き止める。そのため、習仲勲の民主化志向の政治改革をめぐる姿勢を詳しく見た上で、その擁護の背景にある前半生の経歴などを取り上げた。

習近平が全寮制の幼稚園と小学校から帰宅を許されるのは週末のみであった。しかも、週末に帰宅する際、両親・家族と過ごす時間はごく限られ

ていた習近平は、父・習仲勲から受けける影響が少ないため、「習仲勲は毛沢東時代の負の遺産を一掃するために、胡耀邦に協力して、民主化志向の政治改革を成し遂げようとしたながら挫折した。しかしながら息子の習近平は今日までのところ、父親の目指した民主化志向の政治改革に対して冷淡な態度をとり続けている」と指摘した。

終章「日本はどのように習近行政権と向き合うべきか」は、著者の対中国外交に関する政策提言である。近年、中国が日本に対して強硬なアプローチをとってきたのは、東アジアにおける勢力均衡が崩れたからであると指摘。しかし、勢力均衡が崩れたのは、中国の国力が急速に増大したためばかりではない。「中国・ロシア・北朝鮮 対日本・米国・韓国」という3対3の均衡が、特に韓国の朴槿恵政権による中国への接近によって、少なくとも対日関係に関しては4対2とも言い得る不均衡な状況に至ったためでもあるため、「韓国との関係を改善し、日米韓の結束を再び強めて、3対3の均衡を回復すべきではないだろうか」と提言している。

次に本書の分析の限界をみてみよう。

#### 安倍晋三首相との比較について

著者は「安倍の幼少期からの（安倍）晋太郎に対する反発、並びに岸信介に対する親愛こそが、その諸政策の基礎となる思想を形作ったと考える。安倍とよく似た側面のある習近平についても、習近行政権の諸政策の分析に当たっては、習近平の幼少期にまでさかのぼって、父・習仲勲との関わりなどについて解明することが一定程度有益ではないかと考えられる」と指摘した。

この指摘は非常に興味深いものだ。著者は必ずしも明示してはいないが、両者は共に強い権力への志向性を持っているといえるだろう。安倍首相の権力志向は歴史的な背景よりも個人的な経験による部分が強いといえると思うが、問題は習近平

の権力志向の由来は完全にそれと同じではない。

安倍首相には外務大臣となった父親よりも、より「偉い」祖父岸信介（元首相）がいた。習近平にはそのような父親より偉い存在の祖父はいなかった。日本では、安倍晋太郎は安倍家において微妙な立ち位置にいたと言われるが、習仲勲はそのような立ち位置ではなかった。現在までの資料から見ても、習近平は自分の父に対して、そのような否定・反対的な態度を示した形跡はない。

この両者の世襲の内容も完全に同じではない。習仲勲は政治的地位は副総理（政治局員）が最高位で、常務委員という一番上のレベルには到達していなかった。実際、現代中国政治における「太子党」出身といわれる政治家の大半は習近平と似ているような背景を持つ人が多い。彼らの父親の代の多くは毛沢東政治の被害者であった。毛沢東政治が否定されていく改革開放時代で彼らの多くは、父親が不当に迫害を受けたからこそ彼らの地位が上昇していったことは否定できない。

また習仲勲も当時の政治家の中では比較的開明的な政治家であったが、民主化に対してはそれほど強い志向性を持っていましたというわけではない。習仲勲が習近平に対して持つ決定的な影響力は少ないといえる。

#### 中国社会・時代の流れから受けた影響について

指導者の政治的志向性も歴史的な背景と個人の経験の両面によるものであるが、習近平の場合は時代的な背景がより強いといえるであろう。

左・集権への方向転換は今の中国社会の大きな特徴の一つになっている。習近平政権はその大きな流れの中の一部分にすぎない。実際、習近平が最高指導者として登場する以前から中国社会ではこのような傾向がすでに強まってきていた。これは著者から「習近平の政敵」と看做された薄熙來の例からみても明らかだ。薄熙來においてもその大連市長時代及び商務部長時代からこの権力志向

と毛沢東政治への回帰はすでにはっきり現れており、重慶に行ってからはより鮮明になっていく。一番端的にこれを表しているのが、18回党大会で政治局常務委員の人数が9名から7名に削減されたということである。この人数の減少は胡錦濤時代に決めたものであり、やはり胡錦濤時代からの政治状況に、政治権力の集中が求められてきたといえるだろう。

もう一つの原因是中国の国際環境が近年徐々に厳しくなってきたことによるといえる。これは特に「リバランス」の下で、アメリカがアジア太平洋地域に戻ってきたことが大きい。そのような厳しい環境の中での迅速な政策決定が権力の集中で求められているのではないだろうか。

さらに言えば、中国社会でこのような方向転換が図られた最も重要な原因は、過去30年間の改革開放を通じて高度な経済成長が出来たことによるといえる。これが出来たことは中国人の民族的な達成感と自負心を刺激した。最後に改革開放のマイナスな部分、すなわち格差の拡大、政治腐敗などに対する不満が毛沢東時代への回帰を促したのである。

中国では、最高指導者の政治思想について、マルクス・レーニンは「主義」、毛沢東は「思想」、鄧小平は「理論」と呼ばれている。それ以降は急降格し、「三つの代表」（江沢民）、「科学的発展観」（胡錦濤）と「中国の夢」（習近平）といわれている。

30年間に及ぶ高度成長で中国はアメリカに次ぐ世界の大國になった。その大国中国を中央集権的に率いる最高指導者である習近平の政治的な傾向性への分析は、学術的にも高い価値がある。著者は独自の工夫でこの難儀を成し遂げ、習近平研究のひとつの到達点に立った。

現代中国政治史の入門書として、また習仲勲思想を分析する一書としても価値のある一冊である。

（2016年3月刊、190ページ、本体1,900円+税）